

プログラム

若手会員大会発表賞対象口演 1 (学生会員)**11月1日 13:20-14:20 B会場**座長：安達登（山梨大学）

Y-1 体幹部の検討を含む縄文時代人の体形の研究

○田原郁美（東大・理）

Y-2 縄文時代人腓骨の形態学的検討

○萩原康雄（新潟医療福祉大学大学院・医療福祉学研究科）、奈良貴史（新潟医療福祉大学・医療技術学部）

Y-3 イラン、タペ・サンギ・チャハマック出土未成人骨の死亡年齢推定

○宮内優子（筑波大・院人社）

Y-4 古代ゲノムにおけるコンタミネーション推定法の開発とその応用

○石谷孔司（東大院・理）、植田信太郎（東大院・理）

Y-5 古代 DNA 解析における現代 DNA のコンタミネーション推定法○澤藤りかい（東京大・理）、吉田建朗（東京大・理）、植田信太郎（東京大・理）

若手会員大会発表賞対象口演 2 (通常会員)**11月1日 14:20-15:20 B会場**座長：河野礼子（国立科学博物館）

Y-6 ゲノムワイド SNP データに基づく現代日本人の起源に関するモデルのベイズ的考察

○中込滋樹（統数研・シカゴ大学）、佐藤丈寛（琉球大・医）、石田肇（琉球大・医）、埴原恒彦（北里大・医）、木村亮介（琉球大・医）、間野修平（統数研）、太田博樹（北里大・医）

Y-7 対象母集団の年齢分布によって変化する恥骨結合の推定年齢

○佐々木智彦（東京大・博物館）

Y-8 表現型と遺伝子型：チンパンジー、ボノボにおける大腿骨の比較形態発生

○森本直記（京大・理）、Marcia S. Ponce de León（チューリッヒ大・人類）、Christoph P.E. Zollikofer（チューリッヒ大・人類）

Y-9 ヒト、チンパンジー、マントヒヒの成長過程におけるオトガイ孔と下顎歯との空間的關係性

○深瀬均（北海道大・医）

Y-10 生態ニッチ確率の逆数を負荷係数とする移動コスト分析によって大陸スケールでの人類拡散速度を推定する

○近藤康久（地球研）、佐野勝宏（東大・総博）、阿部彩子（東大・大気海洋研）、大森貴之（東大・総博）、大石龍太（極地研）、門脇誠二（名大・博）、陳 永利（東大・大気海洋研）、長沼正樹（北大・アイヌ）、小口 高（東大・空間情報研）、米田 穰（東大・総博）、西秋良宏（東大・総博）

一般口演 1

11月1日 9:30-10:18 B会場

座長：太田博樹（北里大学）

O-1 古代日本列島人の核ゲノム解析（第2報）

○神澤秀明（科博・人類）、Kirill Kryukov（東海大・医）、Timothy Jinam（遺伝研・集団/総研大・遺伝）、佐藤孝雄（慶応・文）、奈良貴史（新潟医療福祉大・医療技術・理学療法）、安達登（山梨大・医）、細道一善（遺伝研・人類遺伝/総研大・遺伝）、井ノ上逸朗（遺伝研・人類遺伝/総研大・遺伝）、斎藤成也（遺伝研・集団/総研大・遺伝）、篠田謙一（科博・人類）

O-2 日本人の頭部形態に関する遺伝要因のゲノムワイド探索

○山口今日子、川口亮、佐藤丈寛、渡邊千晶（琉球大・医）、山本健（久留米大・医）、石田肇、木村亮介（琉球大・医）

O-3 日本人における三次元顔面形態のゲノムワイド関連解析

○木村亮介、渡辺千晶、宮里絵理、山口今日子、佐藤丈寛、川口亮、石田肇（琉球大・医）、山本健（久留米大・医）、河内まき子、持丸正明（産総研・デジタルヒューマン）

O-4 ヒト集団で広範にみられる解毒酵素遺伝子 GSTM1 欠失アリルの進化的起源

○齊藤真理恵（東大・院理）

一般口演 2

11月1日 10:18-11:06 B会場

座長：木村亮介（琉球大学）

O-5 琉球諸島民、北海道アイヌ、本土日本人の集団ゲノム解析

○太田博樹、松前ひろみ、埴原恒彦（北里大・医）、中込滋樹、間野修平（統数研）、佐藤丈寛、木村亮介、石田肇（琉球大・医）

O-6 次世代シーケンサによる古人骨ゲノム解析：コンセンサス配列の構築

水野文月（東邦大・医）、○植田信太郎（東大・院理）

O-7 古代中国 3000 年前の殷墟から出土した古人骨ゲノム解析

○水野文月（東邦大・医）、澤藤りかい（東大・院理）、木花牧雄（東大・院理）、王瀝（杭州師範大・医）、植田信太郎（東大・院理）

O-8 アジア・オセアニア人における代謝特性の民族差の理解を目指したゲノムワイド SNP 研究

○中山一大（自治医大・医）、大橋順（筑波大・医）、香川靖雄（女子栄養大）、岩本禎彦（自治医大・医）

一般口演 3

11月1日 11:06-11:42 B会場

座長：篠田謙一（国立科学博物館）

O-9 フィリッピンの子マヌワ人ははたして“ネグリト”か？

○尾本恵市（東京大・名誉教授）

O-10 ベルテ岬諸島の位置に沈んだアトランティス島から大脱出したRh(-)血液型の古代文明人、「島」生まれのインド・ヨーロッパ祖語と、外孫集団生まれのアルタイ諸語

○酒井哲夫

O-11 母方先祖には先住民が、父方先祖には外来の権力民が現れる例；日本人平均と飛騨びと・DNA解析より

○住斉（東京大・人類学）、佐藤陽一（徳島大・ヘルスバイオサイエンス研究部）、針原伸二（東京大・人類学）

一般口演 4

11月1日 15:40-16:40 B会場

座長：中務真人（京都大学）

O-12 ヒト上顎大臼歯の「退化傾向」：形態地図法による定量化

○森田航（新潟大・院医歯）、森本直記（京都大・院理）、大島勇人（新潟大・院医歯）

O-13 オナガザルの咬耗小面から顎運動を復元する

○清水大輔（京都大・理）、佐々木智彦（東京大・総合博）、諏訪元（東京大・総合博）

O-14 ゴリラ(*Gorilla gorilla*)の犬歯形態と性的二型

○山田博之（愛知学院大学・歯）、濱田穰（京都大学・霊長類研究所）、中務真人（京都大学・理）、石田英實（聖泉大学・看護）

O-15 中国南部における更新世～現代の化石霊長類相の年代的变化

○高井正成（京都大・霊長研）、張穎奇・金昌柱（中国科学院・古脊椎動物古人類研究所）、河野礼子（科博・人類）、王頌（広西民族博物館）

O-16 ギガントピテクス臼歯サイズの時代変化

○河野礼子（科博・人類）、張穎奇・金昌柱（中国科学院・古脊椎動物古人類研究所）、高井正成（京都大・霊長研）、王頌（広西民族博物館）、Terry Harrison（ニューヨーク大学）

一般口演 5

11月2日 8:45-9:45 A会場

座長：奈良貴史（新潟医療福祉大学）

O-17 小竹貝塚出土人骨について

○坂上和弘（科博・人類）

O-18 宮城県山王遺跡出土の甕棺墓内から検出された9世紀前葉の人歯

○鈴木敏彦（東北大・院歯・歯科法医情報）、柳澤和明（東北歴史博物館）

O-19 北海道の縄文早・前期貝塚の再検討ー伊達市若生(わかおい)貝塚を中心にー

○青野友哉・永谷幸人・西本豊弘（伊達市噴火湾文化研究所）

O-20 洞ノ口遺跡出土焼骨資料から推定された東北地方中世の火葬行為の一例

○富岡直人（岡理大・生地）、足立望（岡理大・総情）

O-21 嵩山蛇穴遺跡の年代学的研究

○遠部慎（北海道大学・埋蔵文化財調査室）、畑山智史（埼玉大学・大学院）、村上昇（豊橋市文化財センター）

一般口演 6

11月2日 9:45-10:21 A会場

座長：岡崎健治（鳥取大学）

O-22 ハンセン氏病を思わせるイラン初期農耕遺跡出土人骨

○多賀谷昭（長野県看護大）、長岡朋人（聖マリアンナ医大）、宮内優子（筑波大・院）

O-23 日本列島古人骨集団における四肢の変形性関節症性変化

○鈴木信司、砂川昌信、進藤美咲、木村亮介、山口今日子、佐藤文寛（琉球大・医）、米田 穰（東京大・総研博）、長岡朋人（聖マリアンナ医大・医）、分部哲秋、佐伯和信（長崎大・院医歯薬）、平田和明（聖マリアンナ医大・医）、弦本敏行（長崎大・院医歯薬）、石田 肇（琉球大・医）

O-24 中妻貝塚と姥山貝塚出土人骨における口腔病理、歯牙の外傷及び咬耗の比較

○佐宗亜衣子（東大・理、東大・総合博）、近藤修（東大・理）

一般口演 7

11月2日 10:21-10:57 A会場

座長：坂上和弘（国立科学博物館）

O-25 縄文時代人骨のMSMsの地域的多様性と集団間差の時代間変異

○米元史織（九大・比文）

O-26 骨盤形態から推定される身体プロポーションの西日本地域における時代変化

○高椋浩史（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）

O-27 身長と身分階層の関係から見た近世の女性

○田口哲也（早稲田大学）、奈良貴史（新潟医療福祉大学）

一般口演 8

11月2日 9:30-10:06 D会場

座長：近藤信太郎（日本大学）

O-28 マカク属内腸骨動脈分枝の形態学的特徴

○姉帯飛高，時田幸之輔，小島龍平（埼玉医大・保健）

O-29 クモザル腕神経叢の観察

○緑川沙織（埼玉医大・院医）、時田幸之輔（埼玉医大・保健）、小島龍平（埼玉医大・保健）

O-30 *Homo* を含む現生 Catarrhini の Orbita 内壁の morphology 特に Canales, Foramina, Fissurae, Fossae 等の比較検討

○澤野啓一(1 神歯大,4,11), 横山高玲(2 横市大脳外科), 田中健(3 江戸川病院), 加藤隆弘(3), 高橋常男(1), 百々幸雄(6 東北大医), 鈴木敏彦(7 東北大歯), 澤田元(8 横市大組織), 濱田穰(9 京都大), 川田伸一郎(10 国立科学博物館), 萩原浩明(4 横市大放射線科), 井上登美夫(4), 吉川信一郎(2), 川原信隆(2)

一般口演 9

11月2日 10:06-10:54 D会場

座長：清水大輔（京都大学）

O-31 ヒヒ下顎骨の外側面にみられる窩の形態

○近藤信太郎（日本大・松戸歯）、内藤宗孝（愛知学院大・歯）、松野昌展（日本大・松戸歯）、高井正成（京大・霊長研）

O-32 トガリネズミの双波歯型臼歯における咬頭形成順序

○山中淳之（鹿児島大・歯）、安井金也（広島大・理）、岩井治樹、倉本恵梨子、後藤哲哉（鹿児島大・歯）

O-33 マーモセットにおけるホイッスル様音声の生成メカニズム

○西村剛（京大・霊長類研）、香田啓貴（京大・霊長類研）、徳田功（立命館大・機械工）、脇田真清（京大・霊長類研）、伊藤毅（琉球大・医）

O-34 マカクにおける外表形態特徴とその変異性

○濱田穰（京大・霊長研）

一般口演 10

11月2日 10:54-11:42 D会場

座長：西村剛（京都大学）

O-35 野生アヌビスヒヒがケガを受ける頻度と創傷治癒速度

○松本晶子（琉大・観光）

O-36 アヌビスヒヒにおける皮膚創傷治癒過程の近種霊長類との比較

○内海大介（琉球大・医）、高橋健造（琉球大・医）、松本晶子（琉球大・観光）

O-37 道具使用の学習過程：サルの道具による把持動作のための pre-shaping 動作形成過程

○平井直樹¹、魚谷恭太郎¹、稲富貴美¹、本郷利憲² 佐々木成人²（¹杏林大学・医、²都神経研・神経生理）

O-38 標点を使用しない三次元動作計測システム（ANAKIN System）の精度検証

○足立和隆（筑波大・体育）、石本明生（HAL デザイン研究所）、本多信夫（HAL デザイン研究所）、吉岡松太郎（HAL デザイン研究所）

一般口演 11

11月2日 14:10-14:46 A会場

座長：松村博文（札幌医科大学）

O-39 西ユーラシア中後期旧石器時代人類身体形状の地域変異について

○木村 賛（東京大・総博）

O-40 トルコ新石器時代、ハッサンケイフ遺跡出土人骨（予報）

○近藤 修（東京大・理）、田代恵美（筑波大・歴史人類）、三宅 裕（筑波大・歴史人類）

O-41 フィリピン共和国ミンダナオ島スリガオ市エスカロン洞窟の人骨（エスカロン人）

○馬場悠男（科博名誉教授）、米田穰（東大・博）、金澤英作（北原学院）、尾本恵市（東大名誉教授）、F. A. アルメダ（Surigaonon Heritage Center）、L. E. バウソン（National Research Council of the Philippines）

一般口演 12

11月2日 14:46-15:46 A会場

座長：石田肇（琉球大学）

O-42 上海市広富林遺跡と出土人骨の整理作業（予報）

○岡崎健治（鳥取大・医）、菊地大樹（京都大・人文科学）、高椋浩史（土井ヶ浜ミュージアム）、米田穰（東京大・博物館）、中橋孝博（九州大）、茂原信生、松井章（奈文研・埋蔵文化財）、陳傑、宋建（上海博物館）、張敬雷（南京大）、魏東、朱泓（吉林大・辺境考古）、張樺（Simon Fraser Univ.）

O-43 ウィーン自然史博物館所蔵の日本人古人骨

○橋本裕子（京都大・総合博）

O-44 ケネウイックマンから探る「アイヌ・縄文コネクション」とアメリカ大陸最古の先住民の起源

○瀬口典子（九州大・比文）、ローリング・ブレース（ミシガン大・人類）

O-45 関東貝塚縄文人骨と動物骨のアミノ酸窒素安定同位体分析

○日下宗一郎（総合地球環境学研究所）、陀安一郎（京都大学生態学研究センター）、米田穰（東京大学総合研究博物館）

O-46 イネの炭化穎果における炭素・窒素同位体比

○米田穰（東京大・総研博）、山崎孔平（東京大・総研博）、菊地有希子（パレオ・ラボ）

一般口演 13

11月2日 15:46-16:34 A会場

座長：近藤修（東京大学）

O-47 港川フィッシャー遺跡の堆積状況と年代に関する新知見

○藤田祐樹、山崎真治（沖博美）、新里尚美（八重瀬町教委）、松浦秀治、近藤恵（お茶大）、馬場悠男（科博）

O-48 沖縄先史文化と縄文文化との「遭遇」

○山崎真治（沖縄県立博物館・美術館）・國木田大（東京大学人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設）

O-49 琉球列島南島中部圏（奄美・沖縄諸島）貝塚時代における社会組織の複雑化

○高宮広土（札幌大・文化）、新里貴之（鹿児島大・埋蔵文化財センター）

O-50 カラハリ狩猟採集民における小・中型哺乳類の狩猟

○今村薫（名古屋学院大・経済）

一般口演 14

11月2日 14:10-14:46 C会場

座長：長岡朋人（聖マリアンナ医科大学）

O-51 現代人における骨盤の耳状面前溝とその形成要因

○五十嵐由里子（日本大・松戸歯）

O-52 側方面頭部X線規格写真による琉球弧と本土日本の女性頭蓋顔面形態比較

○山内忠、木村亮介、佐藤丈寛、川口亮、山口今日子（琉球大・医）、深瀬均（北海道大・医）、山口徹太郎（昭和歯）、当真隆、宮本潔人（アドベンチストメディカルセンター）、石田肇（琉球大・医）

O-53 先史縄文人・現代日本人胎児における四肢骨の相対成長

○水嶋崇一郎（聖マリアンナ医大・解剖）、平田和明（聖マリアンナ医大・解剖）

一般口演 15

11月2日 14:46-15:22 C会場

座長：足立和隆（筑波大学）

O-54 大型類人猿とヒトにおける四肢骨の比較発生研究

○中務真人（京都大・理）、森本直記（京都大・理）、山田重人（京都大・医）、荻原直道（慶應大・理工）

O-55 身体プロポーション発育の個体変異

○佐竹 隆（日大・松戸歯）、広原紀恵（茨城大・教育）、S. Koziel (Polish Academy of Sciences)、服部恒明（茨城大・教育）

O-56 成人のデータに認められる近年の日本における反短頭化

○河内まき子（産総研・デジタルヒューマン）

一般口演 16

11月2日 15:22-15:58 C会場

座長：井原泰雄（東京大学）

O-57 統計学的手法を用いた欠損のある原人頭骨の脳容量推定

○久保大輔（筑波大・体育）、河内真紀子（産総研・DHRC）、持丸正明（産総研・DHRC）、荻原直道（慶応大・理工）、海部陽介（国立科博・人類）

O-58 ヒトの生理的早産の進化をさぐる新手法

○海部陽介（国立科博）、矢野航（朝日大・歯）、清水大輔（京都大・理）、西村剛（京都大・霊長研）、金子剛（国立成育医療センター）

O-59 情動伝染と共感行動の進化モデル

○中橋渉（総研大・先導研）、大槻久（総研大・先導研）

一般口演 17

11月2日 15:58-16:22 C会場

座長：海部陽介（国立科学博物館）

O-60 連合パートナーの選択と犬歯サイズの縮小に関する個体ベースシミュレーション

○井原泰雄（東京大・理）

O-61 エージェントベースシミュレーションで解く弥生時代の農耕化に関する問題

○坂平文博（(株)構造計画研究所、東工大・総合理工）、寺野隆雄（東工大・総合理工）

ポスター発表

11月1日 9:30 — 11月2日 15:30 E会場

討論時間：11月1日 11:45-12:30 (奇数番号)、12:30-13:15 (偶数番号)

P-1 人類の進化と活性酸素（今こそジョン・スノウのレポートに学ぶ）

～水素化珊瑚カルシウム（CCH）含有ガムが、なぜ今必要なのか!?～

○中山孔壹（中山歯科矯正医院）

P-2 現生日本人の冠状縫合と中心前溝の位置関係

○小林靖（防衛医大）、松井利康（防衛医大）、灰塚嘉典（杏林大・医）、松村讓兒（杏林大・医）

P-3 ホモロジー画像解析法によるマカク性皮腫脹の組織学的定量

○小野英理（東京大・理）、中根和昭（大阪大・医）、鈴木樹理（京都大・霊研）、石田貴文（東京大・理）

P-4 ヒトの環境適応における自己免疫疾患関連遺伝子に対する選択圧の検証

○Shigeki Nakagome (University of Chicago), Gorka Alkorta-Aranburu (University of Chicago), Roberto Amato (Universit degli Studi di Napoli "Federico II"; University of Chicago), Bryan Howie (University of Chicago), Richard R. Hudson (University of Chicago), and Anna Di Rienzo (University of Chicago)

P-5 脳性マラリアと *SH2B3* 遺伝子多型との関連

○中 伊津美（筑波大・医）、ジントナ パタラポティクル（マヒドン大・医）、ハッタイラ ハナナンタチャイ（マヒドン大・医）、大橋順（筑波大・医）

P-6 ゲノムワイド関連解析による体毛の濃さに関連する SNP の探索

○佐藤丈寛（琉球大・医）、渡辺千晶（琉球大・医）、山口今日子（琉球大・医）、川口亮（琉球大・医）、山本健（久留米大・医）、石田肇（琉球大・医）、木村亮介（琉球大・医）

P-7 ヒトの手形態に関するゲノムワイド関連解析

○米須学美、佐藤丈寛、山口今日子、渡邊千晶、川口亮（琉球大・医）、山本健（久留米大 医）、石田肇、木村亮介（琉球大・医）

P-8 ヒトアキレス腱における膠原細線維構成の部位差の形態計測学的検討

江連博光（昭和大・医）、森陵一（昭和大・医）、伊藤純治（昭和大・保健医療）、大塚成人（昭和大・医）

P-9 ニホンザル足指屈筋群の筋線維タイプ構成

○小島龍平（埼玉医大・保健医療）

P-10 ニホンザル (*Macaca fuscata*) における手掌・足底の接地部の変化：四肢のプロトラクションとの関係

○後藤遼佑、日暮泰男、熊倉博雄（大阪大院・人間科学）

P-11 ヒトとチンパンジー足部構造の3次元有限要素モデル

○中村友哉、荻原直道（慶應大・理工）

P-12 霊長類のロコモーションを知るために — 発達、木登り戦略、左右差、加齢 —

○中野良彦（大阪大・人間科学）

P-13 ヒト二足歩行の起源：8. ロコモーション時の頭部の方向維持性の獲得について

○藤野 健（都老人研）

P-14 投槍器のしくみ：身体から投射体への動力伝達

○日暮泰男、藤原英大、熊倉博雄（大阪大・人間科学）

P-15 測定法および荷重負荷の違いが外反母趾角値に及ぼす影響

○梅原彰宏（帝京平成大・院）、竹内京子（帝京平成大・院）、松村秋芳（防衛医大・生物）、佐藤裕二（帝京平成大・ヒューマンケア）、岡田守彦（筑波大学）

P-16 CT画像を用いた副鼻腔の形態解析：沖縄一本土間比較

○伊藤毅、木村亮介、龍康殿あづさ（琉球大・医）、深瀬均（北海道大・医）、土屋奈々絵、村山貞之、石田肇（琉球大・医）

P-17 臨床用CT機器とMicrosoft Excelを利用した大腿骨皮質の定量評価の試み

○弦本敏行（長崎大・医）、佐伯和信（長崎大・医）、岡本圭史（長崎大・医）、大神敬子（長崎大・医）、分部哲秋（長崎大・医）

P-18 簡易3D構築像による形態分析の実用性 —現代日本人、南九州古墳人の寛骨耳状面を例として—

○佐伯和信、弦本敏行、岡本圭史（長崎大・医）、真鍋義孝、北川賀一、小山田常一（長崎大・歯）、分部哲秋（長崎大・医）

P-19 北海道礼文島浜中2遺跡出土のSAPHO症候群と推定される骨病変を有するオホーツク文化期の成人女性人骨

岡本有可、○石田肇、木村亮介、佐藤丈寛、土屋奈々絵、村山貞之（琉球大・院医）、深瀬均（北海道大・院医）、長岡朋人（聖マリアンナ医大）、安達登（山梨大・医）、米田穰（東京大・総研博）、加藤博文（北海道大・アイヌ先住民研）

P-20 土井ヶ浜遺跡出土の124号人骨における傷痕の古病理学的調査

○大藪由美子（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）

P-21 青森県で出土した江戸時代人骨の齶蝕

○藤澤珠織（青森中央学院大・看護）

P-22 鹿児島県肝付町塚崎古墳群 19 号地下式横穴墓出土の古墳時代人骨

○竹中正巳、下野真理子（鹿児島女子短大）

P-23 鹿児島県肝付町塚崎古墳群 19 号地下式横穴墓出土人骨の歯石から検出されたデンプン粒

○下野真理子、竹中正巳（鹿児島女子短大）

P-24 千葉県大膳野南貝塚から出土した縄文後期人骨群の形態学的検討

佐伯史子（科博・人類）、○澤田純明（聖マリアンナ医大・解剖）、鈴木敏彦（東北大院・歯・歯科法医情報）、波田野悠夏（日本歯科大・新潟生命歯）、篠田謙一（科博・人類）

P-25 9世紀の太政官令「飛驒の民の顔付は他国と違う」を裏打ちする状況; 7世紀人骨と現代人 DNA より

○住 斉（東京大・人類学）、田中和彦（長野県・上田染谷丘高校）、佐藤陽一（徳島大・ヘルスバイオサイエンス研究部）、針原伸二（東京大・人類学）

P-26 石川県内における竪穴状遺構出土の焼人骨

○畑山智史（埼玉大・文化科学）

P-27 火葬墓出土人骨にみられるガラス状膠着物質—岡山県井原市上岩崎中世墓を中心として—

○足立 望（岡山理大・総合情報）

P-28 中国ツングース系少数民族の歯冠計測にもとづく分析

○片岡正太（九州歯科大・歯）、小林繁（九州歯科大・歯）、安細敏弘（九州歯科大・歯）

P-29 ニホンザルにおける下顎大臼歯相対サイズの地理的変異

○浅原正和（京都大・霊長研）

P-30 上顎歯牙の萌出による齢査定と北小松遺跡出土 *Sus scrofa* 頭蓋の形態計測

○江川達也（岡山理大・総合情報）

P-31 先史人類は琉球列島ヘイノシシ・ブタを持ち込んだのか? : 現生リュウキュウイノシシの分子系統解析

○高橋遼平（山梨大・医）、姉崎智子（群馬県立自然史博）、黒澤弥悦（東京農大・学術情報）、本郷一美（総研大・先導研）

P-32 アミノ酸を用いた遺跡出土骨試料の放射性炭素年代測定法

○板橋悠（東京大・新領域）、高野淑識（海洋研究開発機構）、小川奈々子（海洋研究開発機構）、大河内 直彦（海洋研究開発機構）、米田穰（東京大・総合博物館）

P-33 同位体比分析による出身国・地域の新規推定法の検討

○染田英利（防医大・医）、覚張隆史（北里大・医）、橋本正次（東歯大・歯）、小林 靖（防医大・医）、米田穰（東大・総合研究博物館）、石田肇（琉球大・医）

P-34 写楽の作品時期を作品部位の比率より検討

○矢崎勝巳（矢崎郷土史研究所）

P-35 日本人類学会教育普及委員会活動報告 2014

○日本人類学会教育普及委員会

現生人類のユーラシア東部とオセアニアへの拡散移住史についての諸問題

Out of Africa: Issues on the Human Migration to East Eurasia and Oceania

オーガナイザー：松村博文（札幌医科大学）

遺伝子や人類化石の研究にもとづいて現生人類のアフリカ起源とユーラシア拡散が示されてきたが、そのタイミングやプロセスを詳しく描くための証拠の1つとして、当時の文化（特に石器技術）の時空分布とその担い手の同定を試みる考古学研究も数多く行われている。現生人類がアフリカから拡散した時期と経路の解明は、いわば古くて新しい問題でもある。東ユーラシアおよびオセアニアの人類の形態は、大きな多様性を示し、そのことは複雑な移住史をたどってきたようにもみえる。しかし一方、脱アフリカまでさかのぼると、単系統あるいは2, 3の少数の系統に起源が求められている。これまであたりまえのような存在としてみなされてきた北東アジア人は、その仮説としてユーラシア東部北上説と北部横断説が考えられているものの、西半球の人類集団との関係が不明瞭なままであり、現実にはユーラシア南部の集団や縄文人以上にその起源がわかっていないといえる。またいっぽうでは、近年のデニソア人の遺伝子解析は、オセアニアの現代人の一部にも共通の遺伝子がみいだされていることからさらにこの問題を複雑にしているようである。本シンポジウムでは、時代を限定せず幅広い時期と地域において、一線で活躍している各演者の取り組んでいる研究の現状と問題、これからの仮説を紹介する。

講演

1. 東ユーラシア二層構造モデルの構築に向けて

○松村博文（札幌医大・保健医療）

2. 台湾平埔族のミトコンドリアDNA分析

○篠田謙一、神澤秀明（科博・人類）、安達登、角田恒雄（山梨大・医）、蔡佩穎、蔡錫圭（台湾大・医）

3. 現生人類拡散ホモ・サピエンスのアジア初期拡散における“沿岸移住説”は正しいか？

○海部陽介（国立科博）

4. オセアニアへの新石器文化集団の拡散：ラピタ集団以前にマリアナ諸島へ

○印東道子（国立民族学博物館、総研大）

5. DNA データから推定された東南アジアにおけるネグリト人の拡散パターン

○斎藤成也（国立遺伝学研究所集団遺伝研究部門）

S2 ネアンデルタール人の脳機能を探る：現状と課題

11月1日 15:40-17:10 C会場

Towards Uncovering the Brain Functions of Neanderthals

オーガナイザー：荻原直道（慶應義塾大学）、田邊宏樹（名古屋大学）

交替劇プロジェクトでは、旧人・新人の学習能力差を、学習行動を司る神経基盤の形態差に基づいて比較解剖学的に検証することを目指している。そのためには、脳が収まっていた容器、すなわち化石頭蓋とその脳鋳型を精密に復元する手法を開発し、その中に収まっていたはずの脳（化石脳）の仮想復元を行う必要がある。また、現生人類の学習関連機能の神経基盤を機能的MRIにより詳細に検討し、その脳機能地図を作成し、復元した化石脳の学習機能領域について定量的比較解析を行うことが求められる。本シンポジウムでは、我々のグループで進めているネアンデルタール人の脳形態復元と新人との脳機能差研究の現状を紹介するとともに、その課題について議論したい。

講演

1. ネアンデルタール人頭蓋骨の工学的復元と3次元形態解析

○天野英輝、森田祐介（慶應大・理工）、近藤修（東大・理）、鈴木宏正（東大・工）、荻原直道（慶應大・理工）

2. 計算解剖学による復元頭蓋骨を用いた脳形態復元と形態分析

○河内山隆紀（ATR・脳情報研）、田邊宏樹（名古屋大・環境学）、荻原直道（慶應大・理工）

3. 旧人ネアンデルタールと新人ホモサピエンスのエンドキャスト形態差から考える脳機能差

○田邊宏樹（名古屋大・環境学）、河内山隆紀（脳情報通信総合研究所）、長谷川国大（名古屋大・環境学）、天野英輝（慶應大・理工）、荻原直道（慶應大・理工）

S3 アンデス文明形成期における人類学・考古学研究の最新成果 11月2日 10:20-11:50 C会場

Recent Development of Anthropological and Archaeological Studies in Andean Formative Period

オーガナイザー：長岡朋人（聖マリアンナ医科大学）、関雄二（国立民族学博物館）

本研究の目的は、50年以上続く日本のアンデス文明研究の成果を踏襲しながらも、権力という新たな分析視点と分野横断的な手法を考古学調査に導入し、文明初期における複雑社会の成立過程を追究するばかりでなく、人類史における文明形成というマクロな課題に取り組むことにある。アンデス文明形成期（前3000年～紀元前後）に焦点を合わせ、2005年度から日本の国立民族学博物館とペルー国立サン・マルコス大学の学術交流協定に基づく共同調査により、ペルー北高地に位置するパコパンパ遺跡の発掘を行ってきた。遺構、出土遺物の分析を、考古学のみならず、自然科学を含む分野横断的体制の下で進め、数多くの研究成果を挙げてきた。本シンポジウムでは、遺構、出土遺物、人骨、動物骨の分析によって得られた、古代アンデス社会における権力の生成過程、生老病死、動物利用、食性に関する新知見を紹介したい。関氏にはパコパンパ遺跡発掘の最新の成果を、鶴澤氏には動物考古学調査の成果を、長岡氏には出土人骨の生物考古学的研究の成果を、瀧上氏には人骨・動物骨の同位体分析の成果を紹介していただく。

講演

1. ペルー北高地パコパンパ遺跡調査からみたアンデス文明における権力形

○関雄二（国立民族学博物館）

2. アンデス形成期における動物利用 —初期ラクダ家畜の導入と社会変容—

○鶴澤和宏（東亜大学・人間科学部）

3. ペルー、パコパンパ遺跡出土人骨の生物考古学的研究 -2005～2014年調査による新知見-

○長岡朋人（聖マリアンナ医科大・医・解剖）、森田航（京都大・理・自然人類）、関雄二（国立民族学博物館）、鶴澤和宏（東亜大・人間科学）、Juan Pablo VILLANUEVA, Mauro ORDÓÑEZ LIVIA, Diana ALEMÁN PAREDES, Daniel MORALES CHOCANO（国立サンマルコス大）

4. アンデス文明形成期におけるトウモロコシ利用の変化

○瀧上舞（山形大・人文）、米田穰（東京大・総合研究博物館）

東南アジアには現在、原猿類・オナガザル亜科・コロブス亜科・小型類人猿・大型類人猿と多様な霊長類が、あるいは広域に、あるいは局所的に生息分布している。これらの霊長類の分散と経路の解明、そして東南アジアでの系統発生・分散の歴史はどこまで解明されているのだろうか？化石資料が少ないため、現生分類群に関して遺伝子・ゲノム研究による系統地理学、表現型の解析が進められている。近年、表現型からの分類より以上に多くの分類群が認識されつつある。これらの霊長類の多様化に関して、多くの種が群集 (community) を構成していることが注目される。特にマカクは複数種が同じ地域に分布する。これらの種がどのように棲み分けているのだろうか、ロコモーションと社会特徴の面で検討したい。霊長類の進化史はダイナミックであり、気候環境変動によって、そして東南アジアに拡散し活動を展開した現代人類によって、ヒト以外の霊長類の地域集団から属まで、絶滅と適応・分岐があり、また近縁の分類群間で遺伝子浸透 (交雑) によって形質の共通化があったと推定されている。霊長類と哺乳類でどの時期・どこで、どのような集団史・系統発生学的出来事があったのかを検討し、これらのメカニズムを考察してみたい。

講演**1. マカク属の進化：概説**

○濱田 穰（京都大・霊長研）

2. 東南アジアにおける新第三紀哺乳類動物相の変遷とヒト上科の古環境

○仲谷英夫（鹿児島大・理工）

3. マカク属プタオザル種群をめぐる分類・構成種と分子系統地理

○田中洋之（京大・霊長研）、濱田 穰（京大・霊長研）

4. サルゲノム研究の現状と課題

○長田直樹（遺伝研・進化遺伝）

5. マカカ属の社会行動とその進化

○小川秀司（中京大・国際教養）

— 検証、総括および展望 —

Forty Years of Experimental Studies on Primate Locomotion — Generalization and the Prospects

オーガナイザー：岡田守彦（筑波大学）、石田英實（聖泉大学）

バイペダリズムの起源解明に資することをめざす霊長類ロコモーションの実験的研究は 1960 年代末、米国のヤーキス研究所と京大霊長類研でほぼ同時に着手され、その後 70 年代に霊長類研の共同利用研究として本格的に始まった。バイペダリズムの前段階を霊長類ロコモーションの多彩な変異の中に求めるそれらの研究は、動作解析・筋電図・床反力・シミュレーションと様々な手法を駆使するなど、世界に先駆けるものであったが、80 年代以降、欧米でも盛んに行われるようになり、人類起源をめぐる古生物学的・遺伝学的研究の蓄積・進展の中で、行動進化の側面から示唆となる知見を提供してきた。しかし共通祖先 (LCA) の化石が見つからない状況にあって、それら知見の貢献は限定的であったことは否めない。近年、LCA に近いとされる *Aldipithecus ramidus* の骨格が復元され、バイペダリズムの発現について新たな視点からの接近を促す状況が生まれている。霊長類ロコモーション研究の稼動から 40 年、始動からは 50 年近い現時点において、これまでの成果の検証と総括、今後の展望やブレイク・スルーなどについて自由闊達に議論を交わす場としたい。

講演

1. 霊長類機能形態学の昨日、今日、明日？—趣旨提案にかえて

○岡田守彦（筑波大）

2. 発想、計画、方法、成果公開

○木村 賛（東京大・総博）

3. 大阪大学における 1980 年代の LFM 実験研究

○熊倉博雄（大阪大・人間科学）

4. 霊長類ロコモーション研究 —四肢体幹から脳へ、実験室から野外へ

○平崎鋭矢（京都大・霊長研）

5. 筋骨格モデリングとシミュレーションから迫るヒト二足歩行の起源と進化

○荻原直道（慶應大・理工）

コメント 1（関連ポスター発表）

霊長類のロコモーションを知るために—発達、木登り戦略、左右差、加齢—

○中野良彦（大阪大・人間科学）

コメント 2

霊長類のロコモーションと直立二足歩行の起源—全体総括と今後の展望

○石田英實（聖泉大・看護）

S6 人類の社会性とその進化：共在様態の構造と非構造
(進化人類学分会)

11月3日 10:10-12:10 C会場

The Evolution of Human Sociality: Structure and Anti-Structure (Non-Structure) in Co-Existence

オーガナイザー：河合香吏（東京外国語大学）

人類は進化史的にはごく最近（600～700 万年前）まで、チンパンジーやボノボなどの類人猿とともに進化の過程を歩んできた。こうした進化的根拠をもつ人類の存在のありようを見据えるにあたって、その高度な社会的能力（以下、社会性：sociality）の獲得を種そのものの成立における最も重要な特質とみなし、その特質、すなわち社会性の起原と進化について、霊長類社会学、生態人類学、社会文化人類学という3つの学問分野から接近する。これら3分野間で互いの知見や理論を共有し、群居性動物としての人類が発達させてきた複雑で多様な社会のありよう、いいかえれば複数個体の共在様態について、その構造のみならず、「非構造」の側面にも着目することによって、人類の社会性の進化の解明に新たな展開を試みる。具体的な考察対象としては、「集団」という顕在化した社会事象、集団を構成する者たちの行為・行動に見出されうる「制度的なるもの」、および社会性に内在するものとしての「他者」の現れといった諸現象をとりあげる。

講演

1. 「人類の社会性とその進化：共在様態の構造と非構造」趣旨説明
○河合香吏（東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所）
2. 「接続」の方法－霊長類社会学における非構造
○足立薫（京都産業大学・グローバル化推進室）
3. 人類学的視点から考える新たな他者像
○曾我亨（弘前大学・人文学部）
4. 人類小集団の生成と崩壊
○内堀基光（放送大学・教養学部）

コメント 1

○坪川桂子（京都大学・大学院理学研究科）

コメント 2

○真島一郎（東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所）

コメント 3

○諏訪元（東京大学・総合研究博物館）

S7 一歩進んだ遺跡出土動物骨の分析から人類史を読み解く 11月3日 9:10-11:10 A会場
(骨考古学分科会 共催：日本動物考古学会)

Investigation of Human History through Cutting-edge Analyses of Faunal Remains

オーガナイザー：江田真毅（北海道大学）・米田 穰（東京大学）

遺跡から出土した動物骨の分析は、人類の生業、食性、居住環境等の地域性や経時変化の解明に利用されてきた。出土分類群の種名表提示による利用された動物リストの解明から始まった動物骨の研究は、その後急速に進歩している。地球科学や統計学、分子生物学、組織学等の異分野で発展した最新の分析手法を取り入れた動物骨の分析は、人類史を読む解く貴重な情報をもたらすことができる。それらの情報には、人骨や人工遺物の分析からは得られないものも多数含まれる。本シンポジウムでは、新しい分析手法による遺跡出土動物骨の研究に取り組んでいる6名の研究者が発表する。発表内容は、洗練された統計手法を用いた安定同位体比分析の解釈法、アミノ酸レベルでの安定同位体比分析、コラーゲンタンパクによる種同定、DNAあるいはタンパク質に着目した大規模な出土動物骨の分析、マイクロ形態学的分析による種同定と多岐にわたる。発表者には、自身の研究の紹介に留まらず、従来の方法と比べて新しい手法では何が分かるのか、分析に必要なコストや機器、資料の破壊ほどの程度か等を講演いただき、会場も交えて今後どのような応用が望めるのかを議論する予定である。

講演

趣旨説明 江田真毅（北海道大学）

1. ベイズ法を用いた安定同位体比の解釈

○ 蔦谷匠（東京大・新領域）、米田穰（東京大・総研博）

2. アミノ酸レベルでの安定同位体比分析からみた西アジア新石器時代の動物利用

○ 板橋悠（東京大・新領域）、力石嘉人（海洋研究開発機構）、大河内 直彦（海洋研究開発機構）、米田穰（東京大・総合博物館）

3. コラーゲンタンパクによる遺跡出土動物骨の種同定ーキジ科鳥類を対象とした事例研究ー

○ 江田真毅（北大・総博）、永田克己・森本 稔（鳥大・生命機能セ）、水田敏史（鳥大・工）、井上貴央（同愛会）

4. 動物遺存体における古代プロテオミクス解析の現状と展望

○ 澤藤りかい（東京大・理）、植田信太郎（東京大・理）

5. 次世代シーケンサーを用いた動物骨の分析

○ 覚張隆史（北里大・医）

6. 骨のマイクロ形態学的分析による種同定

○ 澤田純明・平田和明（聖マリアンナ医大・解剖）

質疑応答・議論 司会：米田 穰（東京大学）

S8 歯の付着物をめぐって
(歯の人類学分科会)

11月2日 14:10-16:10 D会場

Dental Calculus and Deposit on the Tooth Surface

オーガナイザー：金澤英作（北原学院歯科衛生専門学校）、小山田常一（長崎大学）

歯の人類学はこれまで歯のサイズに関する計量的計測や歯の変異形質についてのノンメトリック計測が主流で、次いでむし歯や歯周病などの病理的な研究が主要な話題であった。一方、歯石など歯の付着物や異常形態については一例報告的な扱いで報告されることが多かった。しかし、最近では分析機器の進歩により、これらについてもその科学的成分や構造が明らかにされるようになり、報告が少しずつ増えている。たとえばネアンデルタール人の歯石から植物化石とでんぷん粒が発見され、それを元に古人類の食生活を復元するという最近のアメリカでの研究などはその好例である。日本人類学会でも、最近、歯石のX線蛍光分析で元素構成比率を計測する試みや、江戸時代の人骨の歯石の量が身分階級によって異なっているという報告、また同じく江戸時代のお歯黒の痕跡を分析機器で探索するなどの報告が行われており、興味深い結果も出ている。今回のシンポジウムではこれらの話題を集め、今後この方面の研究のあり方や意義について討論する。

講演

1. お歯黒と歯科疾患

○小山田常一、北川賀一、真鍋義孝（長崎大院・顎顔面解剖）

2. 古人骨歯石内に残る微化石解析

○矢野航（朝日大・歯）、Henry G. Amanda（Max Planck Institute）、今井啓雄（京都大・霊長類研究所）、江尻貞一（朝日大・歯）

3. 動物の歯石からわかること-動物考古学の立場から

○山崎京美（いわき短大・幼）、高橋正志（日歯大・新潟短大）、遠藤秀紀・米田穰（東京大・総合博）、覚張隆史（北里大・医・学振特別研究員）、金子浩昌（東博・客員研究員）

4. 武士と庶民の間における歯の形態や歯科衛生の差異

○金澤英作（北原学院歯科衛生専門学校）

S9 骨盤とロコモーション

11月3日 8:45-10:15 E会場

(キネシオロジー分科会・ヘルスサイエンス分科会)

Pelvic Morphology and Locomotion

オーガナイザー：中野良彦（大阪大学）、竹内京子（帝京平成大学）

ヒトは日常的な二足歩行を開始したことにより、いくつかの特徴的な骨格の構造を進化させた。そのひとつに骨盤がある。立位時や直立二足歩行時には、骨盤が内臓の重さを受け止める形になっている。増大する脳容量に見合った産道を確保する一方で、歩行のために殿筋が発達したが、その付着部は立ち上って横に広がった骨盤の後面を利用している。本シンポジウムでは四足歩行時と二足歩行時の骨盤を中心とする下肢の構造と運動に着目し、樹上の生活から地上の生活へと移行したヒトの腰回りを中心とした適応と体の成り立ちについて根本から考える。現代人の移動運動や日常生活の原点を二足行動ととらえたうえで、日常行動においてより効率的に力を発揮できる骨盤の使い方、腰痛や歩行の衰えなどを避けて健康に生活するための生活習慣や適切な動きの習得の可能性について考える。

講演

1. 霊長類の骨盤とロコモーション

○中野良彦（大阪大・人間科学）

2. 大型類人猿における骨盤の耳状面前溝とその形成要因

○久世濃子（科博・人類）、五十嵐由里子（日大・松戸歯）

3. 骨盤のかたちと動きからみた類人猿とヒトのロコモーション

○松村秋芳（防衛医大・生物）

4. ヒトの難産とロコモーション

○奈良貴史（新潟医療福祉大学・医療技術学部）

5. ロコモティブシンドローム予防と骨盤の使い方

○竹内京子（帝京平成大・院・健康科学）

S10 「生物基礎」と「生物」で教える人類の遺伝と形質 11月3日 10:20-12:20 E会場
(教育普及委員会【静岡県理科教育研究会、静岡県理科教育協議会 後援】)

Education of Human Genetics and Inherited Traits by Using Newly Compiled Textbooks of “Basic Biology” and “Biology”

オーガナイザー：松村秋芳（防衛医大）、太田博樹（北里大学）

新学習指導要領が公示され、それに沿って編纂された教科書による授業が進められている。高校生の大部分が履修する「生物基礎」では、各教科書とも DNA と遺伝の基礎について 30 ページ前後にわたって取りあげている。そのなかで 2-3 ページほど“ヒト”の染色体、ゲノム計画に触れている。また、からだを構成する細胞と遺伝情報について触れている。「生物基礎」を履修した後に、二割程度が選択履修する「生物」では、遺伝情報の発現、ヒトの染色体にある遺伝子座、ヒトの伴性遺伝、突然変異、一塩基多型、分子進化と中立進化、分子時計など“ヒト”の遺伝や進化に関わることがらが随所に取りあげられている。本シンポジウムでは、教科書のこれらの内容を踏まえながら、研究進歩の早い遺伝学分野の情報を高校教育の中でどのように扱ったらよいか、人間性の由来や多様性の理解、倫理観の涵養にどのようにして役立てるか、どのようにしたら教育普及委員会のサイドから人類遺伝学に関連した情報を授業のネタとして現場の教員に適確に提供できるか、といった諸課題について考える。また、自然人類学の視点は医学の視点と異なるところがあるが、同じ教材でもいろいろな見方ができるのではないかとこのところを議論したい。さらに、生物の遺伝に関する基礎的な内容を理解する助けとなる人類遺伝学分野の情報と、「生物基礎」から「生物」にわたる授業の展開にフィットするそれらの組み合わせについて検討をすすめたい。

講演

1. 新教育課程と遺伝学：高校の授業で遺伝学をどのように扱えばよいのか

○芥川昌也（静岡県立浜名高校）

2. 「生物基礎」と「生物」で理解するヒトの遺伝と進化

○中山一大（自治医大）

コメント 1

○齋藤成也（国立遺伝研）

コメント 2

○近藤修（東京大学）

総合討論

司会 太田博樹（北里大学）